

ABSTRACTS – IBPJ - Volume 23, Number 1, 2024

対人暴力被害者のためのポリヴェーガル理論に基づくセラピューティック・ドラミング

－ 予備的研究 －

Jessica Hogle, Debra Nelson-Gardell, Nancy Rubin

要約

トラウマ・サバイバーが、対人暴力によって生じる様々な生理的反応や症状に対処するためには、脳、心、身体を統合する治療法を取り入れることが不可欠である (van der Kolk, 2014)。セラピーに身体を含めないと、治癒に必要な不可欠な要素が抜け落ちてしまうのである。ポリヴェーガル理論は、トラウマへの生理的反応を生物学と神経科学の観点から説明するのに役立つ (Porges, 2018)。治療ツールとしての新たな手法には、リズムとドラミング（ドラムを叩くこと）を取り入れた。本介入では、音とリズムを通してさまざまな神経系の状態を探索するといったように、ポリヴェーガル理論の概念をセラピューティック・ドラミング・エクササイズに統合した。研究協力者に対し、リズムとドラミングを組み込んだ個人療法を5回実施し、最終セッションでは、ドラミングを用いて自身のトラウマ・ストーリーを創作してもらった。その後、研究協力者に対して、自身の体験についてインタビューを行った。録音したインタビューデータは文字起こしした上で、コード化し、主題分析を行った。インタビューからは、「音とのつながり」、「洞察」、「主体性」、「安全感」、「社会とのつながり」といった5つの主要なテーマが見出された。本プロジェクトの目的は、予備的な研究として、研究協力者がドラミング・セッションで何を好み、何を得たかを発見することであった。結果的に、研究協力者全員が、孤独感からつながりの感覚への変化に言及した。また、ドラミング・セッションは、言葉では言い表せないような苦しい感情や思い出を表現する上で、創造的で安全に気持ちを発散できる場となっていた。

キーワード：トラウマ、リズム、ドラミング、ポリヴェーガル、予備的研究

Editor-In-Chief *Aline LaPierre* editorinchief@ibpj.org

Deputy Editor *Christina Bogdanova* deputyeditor@ibpj.org • Assistant Editor *Kalina Raycheva* assistanteditor@ibpj.org

Assistant Editor *Helena Vissing* contact@helenavissing.org • Managing Editor *Elvira Kasneci* managingeditor@ibpj.org

創造的主体性 (Creative Agency)

－人生径路の変容－

Larry J. Green

要約

本稿では、内的葛藤を扱い、それに対処するための方法として、ソマティック・アウェアネスを用いた実践について論じる。二事例を基に、クライアントが変容の可能性を帯びた事例、クライアントが行動変容を実現した事例について説明した。最初の事例では、変容プロセスへの始まりについて、二つ目の事例では、その後生じた予期せぬ有益な結果について述べた。このプロセスは、限られた基盤となる前提を超える新たな前提に置き換える創造的な行為によって生み出され、結果としてその人の人生径路を変容することになる。創造的主体性は、この新しい精神のあり方を生み出す源であり、力でもある。この能力は、個人的な意識の枠を超えること得られる。そこに到達すると、無私の意識で活動することが可能になる。この可能性は、人間には生まれながらにして無私の意識が備わっているという考えに基づいている。元々は、個々の自己を構築するために用いられ、個人の経験の積み重ねの蓄積となる。変容には、元の自己を生み出したのと同じような超自然的な力への接触が必要である。最初の創造も、それに続く変容も、無私の意識によって生じる。本稿を通して、理論的な解釈を織り交ぜながら、筆者のアプローチがいかにか身体的で実存的な知性、つまり創造的な主体性をどのように活用しているかを明らかにした。

キーワード：無私の意識、変容、主体性

Editor-In-Chief *Aline LaPierre* editorinchief@ibpj.org

Deputy Editor *Christina Bogdanova* deputyeditor@ibpj.org • Assistant Editor *Kalina Raycheva* assistanteditor@ibpj.org

Assistant Editor *Helena Vissing* contact@helenavissing.org • Managing Editor *Elvira Kasneci* managingeditor@ibpj.org

バイオジェネティック・アナリシス

－ 21 世紀のレンズを通して見たエンボディド・エモーションー

Leah Benson

要約

バイオジェネティック・アナリシス（Bioenergetic Psychoanalysis : BioPsyA）は、脳機能と感情に関する 21 世紀の科学にならい、感情と認知は機能的に区別できず、脳の内受容的感覚とその分類過程から生じるものであると仮定した。感情は、状況的な文脈の中で無意識のうちに感情状態に適用される学習された認知的構成要素であるが、感情は認知的評価と混同されることはない。感情に対する生理的・エネルギー的な防衛は、慢性的な筋緊張に特有なパターンであり、早期の養育環境において形成される。感情を捉え、調整する方法には、観察スキルの習得、各人にフィットするムーブメントの練習、関係性のエクササイズへの取り組みが含まれる。その介入のあり方は、実践家の創造性とクライアントのニーズに自然と導かれる。身体志向的介入は、セルフ・アウェアネス、自己表現、自己調節の向上を目的とし、それにより、クライアントは個人的な目標や人間関係に関する目標に到達するようエンパワメントされる。現代の神経科学との統合を通じて、BioPsyA は、治療のコンテキストでの身体と感情の相互作用に関する新たな洞察をもたらすのである。本稿では、エビジェネティックな変化をもたらすアチューンメント・タッチの側面と、その可能性について探索した。特に、バイオダイナミック・マッサージのように、タッチを用いたボディ・サイコセラピーの技法において、クライアントの変化を説明する仮説を提唱し、その臨床的な現象を解明するための動物モデル研究の応用について説明した。

キーワード：構築された感情の理論（theory of constructed emotion）、バイオジェネティック・アナリシス、予測処理、能動的推論、キャラクター・タイプ

Editor-In-Chief *Aline LaPierre* editorinchief@ibpj.org

Deputy Editor *Christina Bogdanova* deputyeditor@ibpj.org • Assistant Editor *Kalina Raycheva* assistanteditor@ibpj.org

Assistant Editor *Helena Vissing* contact@helenavissing.org • Managing Editor *Elvira Kasneci* managingeditor@ibpj.org

ソマティックな形と感情

ーフォーミング心理学と加速化体験力動療法の統合ー

John Cornelius

要約

本論文のテーマは、フォーマティブ心理学のボディ・サイコセラピーモデルを、感情中心モデルの加速化体験力動療法（Accelerated Experiential Dynamic Psychotherapy; AEDP）と組み合わせることで、臨床的成果を高めることができるというものである。AEDP は、ポジティブな経験を重視し、積極的に反応することで、防衛を緩和し、不安を調整する。これにより、適応的な核心的感情体験にアクセスしたり、不適応な感情を変容させたりすることが可能となる。フォーマティブ心理学の How テクニックは、AEDP の防衛／生存戦略、不適応な感情、または複雑な自己状態の身体的形態に適用することができる。How テクニックは、身体的フォームを増やし、その意味と機能を理解し、その形を元に戻して、より回復力のある、臨機応変な身体のあり方を発見する。本論文は、そのテーマに説明した上で、テーマへの質的エビデンスを提供する2つの事例研究を分析した。結論として、フォーマティブ心理学とAEDPは補完的なモデルであり、適応的な核心的感情体験にアクセスし、それを適合した身体的フォームにまで深め、不適応な感情の固着を和らげるために、協働するものと言える。

キーワード：フォーマティブ心理学, AEDP, 感情, 身体

影響を与えるジェスチャー

Katharine Young

要約

ジェスチャーには、感情が反映される。ソマティック・セラピーのセッションの過程で、ある女性は、自身の体の前のスペースに、原腸形成の過程にある胚を思い浮かべる。このジェスチャーは、同時に、赤ちゃん、夢の中の赤ちゃん、未来の自分、そして自分の身体の内部を象徴的に表している。ジェスチャーのこれらの仮想的な実体との触覚的・運動感覚的な関与によって、それらは彼女にとって触知可能なものになるだけでなく、彼女と対話する人々にとっても目に見えるようになる。彼女自身の仮想の内部、仮想の他者、そして仮想の自己の触感が、彼女に影響を与える。人々が話すときに行うジェスチャーは、それに付随する言葉の意味を構成する。共同スピーチジェスチャー（人の発話に関連する身体表現）は、ジェスチャーをする人がその意味について抱く感情をも形成する。自身に影響を与える能力は、身体心理学がどのように作用するだけでなく、ジェスチャーが通常の交流の中でどのように自分の感情を形成するかにとっても重要である。

Keywords: phenomenology, affect, gesture, somatic psychology, intraaffectivity

キーワード：現象学、感情、ジェスチャー、身体心理学、イントラアフェクティビティ

心理療法とボディ・サイコセラピーに関する研究の新しいパラダイム

Courtenay Young

要約

本論文は、2部構成であり、心理療法が心理学や精神医学とは異なる独立した専門職としての地位を確立しつつある、主にヨーロッパの視点から、今日の心理療法の専門職にとって、適切な研究とは何かを考察するものである。本稿の第一部では、より幅広い要因と心理療法トレーニングの異なる性質を考慮し、臨床的実践、クライアントとセラピスト関係、クライアントのニーズに添うセラピーを望むセラピストへの関心の高まりに適した最新の研究方法について議論した。本稿の第二部では、心理療法における特定の主流であるボディ・サイコセラピー（身体志向心理療法／身体心理療法）に注目し、エビデンスベースでの研究と経験的に確認された治療法を支持するために適した研究方法について検討した。

キーワード：心理療法研究方法論、コンピテンス、ボディ・サイコセラピー、エビデンスベース

クライアントはソマティック・エクスペリエンス®・セラピーをどのように体験するか

その要因を探る解釈的現象学的分析

Gregory James

要約

研究の背景 現在のソマティック・エクスペリエンスの研究では、目覚ましい治療成果や生物学的根拠が得られる一方、セラピーを受ける人々の生活体験に注目したクライアント中心の視点による研究は不足している。クライアントからその治療体験について学ぶことで、介入法の考案や修正、治療の変容に関する理解の促進、今は明らかになっていないクライアント治療プロセスについての洞察を得るために、治療的成果の助けとなったり妨げとなったりする多くの要因を明らかにすることができる。このような要因には、クライアントが治療に関して最も価値を置いていることと同様に、セラピストには表現されていないクライアントの恐怖、不満、回避が含まれるかもしれない。

方法 研究協力者に対して、半構造化式でインタビューを実施した。データの処理には、解釈的現象学的分析（Interpretive phenomenological analysis；IPA ※一人称の語りを三人称の視点から分析する手法）を用いた。IPAのガイドラインに沿うため、サンプルサイズは必然的に小さくなった。

結果 IPA分析により、コミュニケーションとペーシングという2つの上位テーマが抽出された。そして、コミュニケーションという上位テーマの下には、インターク・アセスメント、期待、心理教育が下位テーマとして位置づけられた。

結論 本研究による質的検討で明らかになった、セラピーにおいてクライアントが体験したプロセスは、ソマティック・エクスペリエンス・プラクティショナー（Somatic Experiencing Practitioner：SEP）が、自身の治療的アプローチがどのようにクライアントに経験されるかをより理解する上で大いに役立つ。

キーワード：ソマティック・エクスペリエンス、クライアント視点のセラピー、トラウマの治療、共通要因

Editor-In-Chief *Aline LaPierre* editorinchief@ibpj.org

Deputy Editor *Christina Bogdanova* deputyeditor@ibpj.org • Assistant Editor *Kalina Raycheva* assistanteditor@ibpj.org

Assistant Editor *Helena Vissing* contact@helenavissing.org • Managing Editor *Elvira Kasneci* managingeditor@ibpj.org

ネパール語版身体症候尺度（N-SSS-8）の翻訳，文化的適応および CFA

Yubaraj Adhikari & Birgit Senft

要約

研究の背景 身体症状尺度（The Somatic Symptoms Scale; SSS）は、個人の身体的負荷を評価するための簡易評価およびスクリーニングツールとして開発された。臨床や研究に用いるための SSS の簡易尺度は、ネパールの文化的に適応したネパール版は開発されていない。本研究では、心理測定分析を通して、翻訳、文化的適応、テスト、心理測定ツールとしての SSS の簡易尺度の適用可能性を検討した。SSS の簡易尺度の信頼性と妥当性の検討のために、確認的因子分析（Confirmatory factor analysis; CFA）を用いた。

目的 CFA を用いて、SSS-8 の翻訳版と文化的適応版の妥当性と信頼性を検討した。

方法 ネパール人医師 547 名に対して、オンラインおよび紙媒体の SSS-8 を用い、その心理的負荷について調査を実施した。なお、翻訳、文化的適応、予備的検討、CFA、およびその他の適用可能な心理測定テストが行われた。

結果 構成概念の Cronbach alpha (α) の信頼性スコアは、0.804 であった。胃腸症状を表す胃または腸の問題の 1 項目を除くすべての項目において、適切な因子負荷量であった。モデルの指標の適合度が、許容基準を満たしたことから、構成概念妥当性が確認された。抽出された分散の平均が各下位尺度について 0.5 未満であったため、収束妥当性は確認されなかった。一方、尺度の判別妥当性は確認された。ネパール語版 N-SSS-7 を事後解析のため CFA を用いて分析した結果、疼痛、心肺、疲労の 3 因子モデルが確認され、モデル適合指標（SMR, RMR, RMSEA）はすべて 0.08 以下であった。NFI, TLI, AGFI, CFI のモデル適合度は 0.94 以上であった。

結論 CFA により、ネパール版身体症状尺度（N-SSS-8）は、ネパール人の身体的負担を迅速に評価する上で、有効かつ信頼性の高いツールであることが確認された。

キーワード： 身体症状尺度，ネパール版，文化的適応，確認的因子分析

Editor-In-Chief *Aline LaPierre* editorinchief@ibpj.org

Deputy Editor *Christina Bogdanova* deputyeditor@ibpj.org • Assistant Editor *Kalina Raycheva* assistanteditor@ibpj.org

Assistant Editor *Helena Vissing* contact@helenavissing.org • Managing Editor *Elvira Kasneci* managingeditor@ibpj.org

感情の媒体としての水

Eleonore ten Thij, Moniek van Slagmaat, Truus Scharstuhl

要約

問題 臨床的観察では、水中でのハプトセラピーによって、クライアントがポジティブな感情を体験する力が向上することが示唆されている。水は感情的アフォーダンスと考えられており（Fuchs 2013）、身体への気づきを促すために使用され、身体化された感情への気づきを高める。水中では、セラピーの中でタッチをより繊細に、控えめに使うことができるため、親密さや感情的なタッチで安全感を体験することが困難なクライアントに有益となるかもしれない。本研究では、このような観察内容を研究可能なものにするための方法を考案し、検討した。

方法 本研究では、感覚的気づきの改善が、よりポジティブな感情経験につながるという仮説を立てた。ベースとなるエンボディメントと感情的共鳴の領域を活力や実存的感情などの特定の感情体験を関連づけたの質問紙 (QWAM-22) を作成した。STH ウォーターの学生 40 名に対して、学習イベントの前後に QWAM-22 を用いて調査を実施した。

結果 QWAM-22 の信頼性は高かった。また、感覚的な気づきとポジティブな感情の向上が示された。

考察 今後の研究課題としては、様々な人々に QWAM-22 を実施し、QWAM-22 の基礎となるモデルを検討する、水中でのハプトセラピーの効果を他のハプトセラピーによる介入の効果と比較する、治療効果の測定を追加実施することが挙げられる。

付録： 質問紙（QWAM-22）。

キーワード： 感覚的気づき（センサリーアウェアネス）、感情、水中でのハプトセラピー